

あびの文化

発行人
美崎 大洋
我孫子市
高野山
250-23
04(7182)
0861

第三十六回記念文化講演会

■ 日時 五月二十二日(日)午後2時〜4時

■ 会場 アビスタ2階小ホール

■ 共催 我孫子市教育委員会

我孫子の文化を守る会

演題 「我孫子・白樺派」という文化空間

講師 稲村 隆氏(我孫子市白樺文学館 学芸員)

講師の言葉

「我孫子に住んだ白樺派、柳宗悦、志賀直哉、武者小路実篤。柳にとっては、「民藝」へと続く出会いと絆の地、志賀にとっては止まっていた筆が動き出した「創作」の地、武者小路にとっては、「新しき村」への想いを熟成させた「思索」の地といえるだろう。

では彼ら白樺派の存在は我孫子にとってどのような存在であったのだろうか。「我孫子・白樺派」という文化空間、そして画家、歌人であった原田京平の存在などから考察してみたい。」

当会では昨年からは白樺派について研究・勉強することを事業計画のひとつに掲げているが、今回の講演会はその一環である。また三月四日の新聞で次のような記事が掲載されたこともあり、今回の講演は時宜を得たものと思われる。

「白樺派を代表する作家、志賀直哉の原稿や書簡、写真など1万1886点が遺族から日本近代文学館(東京都目黒区)に寄贈された。小説「和解」に描いた父との不和を叔父に打ち明けようとした書簡や、細かな書き込みがある原稿、日付と署名の入った遺言など初めて確認された資料も含まれている。

専門家は「これほど膨大な資料が残る作家は他にない。作家研究だけでなく、時代の証言としても貴重」と話す。

平成二十八年年度総会

上記講演会に先立ち、同日(5月22日)午後12時30分から同じ会場で行われる平成二十八年年度の総会を開催します。今年度の活動を決める重要な場です。多くの会員の方の参加を期待します。

平成二十八年年度事業計画(案)

一、総会、文化講演会(五月二十二日)

二、史跡文学散歩(五、九、十一、三月予定)

三、放談くらぶ(原則偶数月第一日曜午後2時)

四、文学の広場掲示板への短歌6首掲示(年3回、1ヶ月間)

五、「美しい手賀沼を愛する市民連合会」への参加

六、文化活動関係団体との連携協力

七、プロジェクト活動への全員参加を進める

八、ホームページの充実

九、杉山英先生の業績を多くの市民にPR

十、白樺派についての継続的研究・勉強

リレー連載「白樺と私」

一絆を結び、それぞれに生きた柳と志賀と

武者小路一

村上智雅子

一・白樺派の縁で我孫子に住む

学生時代、在る文学全集の志賀直哉編の年譜作成のお手伝いをしたことがありました。当時漱石や石川淳に親しんでいた私には、直哉や白樺派の作家達は遠い存在でした。しかし、その作業の中で何故か我孫子という地名と音の響きが心に残っていました。

三十代後半に、筑波に勤めることになった主人が常磐線沿線の柏あたりに引っ越そうと申しました。その時、我孫子がどんなところかも知らずに「絶対我孫子にして」と主張した私でした。幸い沼の畔に住むことが

でき、五人の子育ての疲れを日々手賀沼を眺めることで癒され、力と励ましを得ました。

子育てが一段落した頃、我孫子の文化を守る会の書記をしていた友人に代役を頼まれ、そのまゝ万年書記をして今に到っています。

二・文化を守る会に入って文学回帰

二十周年記念誌企画の折、当時の会長三谷和夫氏の熱心なお勧めにより「志賀直哉の我孫子時代とその家族観」と題して、二十枚の論文を拙いながらまとめることが出来ました。これを契機に建ち上がったばかりの白樺文学館館長の武田康弘氏が声をかけて下さり、「志賀直哉と我孫子」について話をする機会を得ました。人前で話すことの苦手な私の訥々とした話を皆さん良く聞いて下さいました。白樺文学館のオーナー佐野力氏をはじめ歴代の館長さんとスタッフの方々には大変お世話になり育てていただきました。それから放談くらぶで「志賀直哉・柳宗悦より我孫子一小の生徒に贈られた漢和大字典」、白樺文学館十周年記念では「我孫子時代の志賀直哉」、県民講座で「志賀と武者小路とメルリンク」、ガイドクラブで「志賀直哉と武者小路実篤—我孫子を中心とした二人の絆—」などと、ここまで何とか研鑽を積むことが出来ました。

三・嘉納に招かれた柳が志賀と武者小路を呼ぶ

先日、紅野敏郎先生の研究エッセイ『貫く棒の如きもの』を読みました。実証的で淡々とした口調の中に、白樺派や文学に対して敬愛しつつも、真実をぎゅつと握っている眼力と誠実さと大らかさに心打たれました。生涯慕われた志賀直哉については言うにおよばず、自由闊達に様々なジャンルを生きた武者小路に対して、更に柳宗悦についても「若い時代から科学的学究心と詩的精神の合一を考えた人」であるとかかなりの頁を割いておられるのが新鮮でした。

今まで私は志賀と武者小路だけに焦点を当てて来

ましたが、実は志賀と柳はかなり前から付き合いがあり、手紙のやりとりでは武者小路よりも前に始められたことがわかりました。柳が学習院高等科の学生であった時、東大生となった志賀に手紙を出しています。

「君等が居なくなつて、輔仁会の邦語部は一大危機に遭遇して居る」

六歳年下の柳が先輩に対して堂々と対等に向き合っています。前回のリレー連載で藤井さんが有島とロダンの往復書簡を紹介していましたが、白樺派の青年たちは実に頻繁に手紙をやりとりしています。この手紙交流は白樺派の特徴であったと紅野先生は指摘しています。

明治四十一年の柳から志賀への手紙には「赤城」についてだけでなく、メーテルリンクの『智慧と運命』についても述べています。「非常に面白く感じました」、「春のような人生感」です。「在来の勢力がある説に拘泥せずに、自己の考えた処は、めっちゃに気持ちよく思ひました」と記しています。志賀が創作の上でも人生の上でも「智慧と運命」から示唆を受け、「好人物の夫婦」を書いたことは良く知られています。柳が学生時代からこれだけ明瞭に言っている事は興味深い。

こうした手紙交流の先に、叔父嘉納治五郎の勧めで我孫子に住んでいた柳が「我孫子に來ないか」と志賀を誘い、志賀が武者小路を誘うという図式が成り立つたわけです。この三人の絆と交流と手賀沼の自然という土徳(どとく・土地の持つ恵みと力)が磁場となり、バーナード・リーチが訪れ、中勘助、瀧井孝作も住まい、ここに文学と美術と友好を求めて多くの白樺派の作家や画家、評論家が集いました。

大正の初期から十数年の間、我孫子は白樺文化村の様相を呈しました。彼らはこの地で家庭を営み、再生の力を得てそれぞれ作家的方向を見定めて旅立つて行きました。

この地我孫子に定住した私の白樺派研究は、ゆっくりとまだまだ続きます。

あびこだより 6号

『白樺村と美術館』

三谷 和夫

大正5年(1916年)武者小路実篤が我孫子に住み、柳宗悦と志賀直哉と白樺三人衆が揃って住んだことになる。当時文士村の言葉はまだなかったが、我孫子の文士村というべき白樺村が成立したといえよう。本年(平成28年・2016年)はそのちょうど百年のちに当たる。

日本の首都東京に明治に東京大学(の前身)が設立され、その教授らが東京に住み、当然の成行きとして都内各地に文士村が誕生して行く。東京都区内では本郷(明治23年ころ)、牛込(明治24年ころ)、小石川(明治25年ころ)、大久保・戸塚(明治40年ころ)、六番町文士村(明治43年ころ)にそれぞれ文士村が発足したと考えられる。

大正に入つて、我孫子白樺村が大正5年に、鎌倉文士村が同8年にできたようである。従つて東京を除けば、地方で文士村ができたのは我孫子の白樺村が最も早かつたといえそう。そして文士村の実態を見ると、白樺村の場合、その文人すなわち白樺三人衆が同じ学園(学習院)の同窓生であり、しかも明治43年創刊の雑誌「白樺」の誌友であった。年齢も接近しており、日々交流して切磋琢磨し合い、それぞれが大きい成果をつくり上げていったのである。白樺村は文士村としての大きい特色をみることが出来る。武者小路が宮崎に「新しき村」建設のために我孫子を大正7年に去つたが、相前後してバーナード・リーチが窯を築いて陶芸にとりくみ、また瀧井孝作や中勘助が移り住むなど大正期の我孫子は文人のさまざまな活動が盛んであった。

さてここで白樺派の活動のうち、美術館建設を目ざした構想から挫折についてまとめておきたい。

それには先ず「白樺」のロダン記念号刊行にさかのぼらなければならぬ。西洋美術を愛好し、その紹介に努めた白樺派であり、明治43年11月刊行の「白樺」いわゆるロダン号がロダンの第70回誕生を祝つてパリのロダンあてに送られた。翌44年にロダンの作品「ゴッツキの首」、「ロダン夫人胸像」、「或る小さき影」のブロンズ3点が到着した。関係者の喜びは大きかった。このロダンの3作品を永く公有にしたいという望みが美術館を起す動機を与えた。「白樺」大正6年10月号に「美術館をつくる計画に就いて(並びに同志の人の寄付をつのる)」が掲載される。

真の美術館は金だけでは出来ない。芸術にたいする真の愛がなければ……。ロダンの彫刻とデッサン、セザンヌとゴッホの画、それだけでも、我々ほどの位い深い喜びを以てその室に入ることが出来るか……。

場所は東京か、東京のごく近くに……。一度一円だけ寄付されれば会員とし終身のパスをお送りする。金は志賀直哉方に送つてほしい。先ずセザンヌとゴッホの油絵を買うことを目標とする。何れかを早く見たい方はその旨書いてほしい(CかGか)。もし金が集まらなかつたらお返しする。受けとりは出さないが、「白樺」で会計報告する。といった具合だ(以上抜き書き)。

「白樺」同号に寄付金第1回報告がある。また「白樺」大正6年11月号に熱心な賛成者の手紙の一部がのせられた。

白樺美術館寄付の応募状況を「白樺」誌上の「報告」から見てゆくと次の通り。

(次表参照)

大正12年9月関東大震災が発生、「白樺」は廃刊となる。白樺美術館は寄付金の報告もなく、美術館建設についての動きもないまま休眠状態であったようである。ここに白樺美術館建設運動は挫折した。

	回目	会員数 (累計)	口数	備考
大正6年10月	1回	20	64	
大正6年11月	2回	83	328	
大正8年05月	20回	1244		
大正8年06月		1260		
大正8年08月				2万円以上集まりし時、小さき会場を東京かその近くに建てます
大正9年04月	29回	1315	6754	資料⑥
大正9年09月	30回			(第2期と改める) 資料⑦
大正9年10月	第2期2回	19	127	
大正10年01月	5回		155	
大正10年06月	9回	70	1112	資料⑧
大正11年05月	10回	73	1127	
大正11年06月				
大正11年12月				
大正12年06月				資料⑨

資料⑦ 今美術館の持つて居るものは、ロダンのロダン夫人の胸像、或る小さき影、巴里のゴロツキ。(以上彫刻白樺寄附) ジョンのデッサン。ラムのデッサン。(以上リーチ寄附)
資料⑧ 今美術館の持つて居るものは、ロダンのロダン夫人の胸像、或る小さき影、巴里のゴロツキ。(以上彫刻白樺寄附) ジョンのデッサン。ラムのデッサン。(以上リーチ寄附) セザンヌの風景、デューラーのエッチング「正義」、シャヴンヌの素描

資料⑨

累計 会員数 千三百十五

口数 六千七百五十四

東京 四〇二(五百八十二人)

兵庫 五百七十九(七十七人)

京都 四百七十二(八十一人)

神奈川 三百七十三(二十八人)

長野 二百七十八(二百五人)

千葉 二百五十九(二十五人)

大阪 百八十三(六十九人)

資料⑩ 六號雜記

武者小路 實篤

○白樺美術館についてはこの頃何にも報告しなかつた、が誰も何とも云はずに安心してゐてくれたことを感謝します。今度カリエールの石版のロダンの肖像を六百五十圓で買ふことにしました。あと百三十圓のつてあるさうですが、何かいゝものゝあつた時買ひたく思ひます。額縁のない畫が多いので、額縁もつくりたく思つてゐますが、之は自分達の方で金をつくらうかとも考へてゐます。ともかく畫を買ふ方は之で一先つうち切りにして、何處かにならべて見たい人に見せることにしたく思つてゐます。いゝ處がないので困つてゐますが、三島の厚意で三島の家にあづけ、毎月日をきめて、二回公開することにしやうと皆で話しました。くわしいことは東京にある同人が相談してきめること思ひます。

○この間は西洋からほとんどん畫が來、自分達が美術館をたてないでもほとんどんものが、來るやうになりました。松方幸次郎氏の美術館でも出來たら、随分いゝものが見られると思ひます。

○ですから自分達の美術館の仕事は打ち切りにしてゐると思ひます。残つた百三十圓を一番有効につかうことは東京にある同人にまかせたく思ひます。

『楚人冠と慶應義塾の意外な関係』

美崎 大洋

我孫子市教育委員会が編纂した『杉村楚人冠関係資料目録』(3分冊)の第3巻「書類」に楚人冠が自ら切り抜き、台紙に貼り付けた新聞記事(スクラップ)が数多く含まれている。職業柄、専門とするジャーナリズム関係の記事が圧倒的に多いのは当然だが、その中に『三田新聞』に関するもの4点を発見した。

- ・昭和十二年四月十六日付け「三田新聞」の創立20周年を迎えて
- ・昭和十二年五月五日付け「三田新聞」創立20周年を祝す「学会章創の頃を語る 座談会」
- ・昭和十二年六月十五日付け「三田新聞」塾生のジャーナリズム調査
- ・昭和十二年七月十日付け「三田新聞」塾生のジャーナリズム調査

さらに同関係資料目録第2巻「書簡」の中を調べてみると、慶應三田新聞学会から送付された「三田新聞学会創立15周年記念(昭和七年六月)と「同20周年記念(昭和十二年五月)の「晩餐会招待状」の2通が見つかった。「書簡」の中で見つけた慶應三田新聞学会からの招待状がどのように楚人冠と関係するのかわかると、当時東京朝日新聞の重役であった著名人の楚人冠ゆえ、晩餐会に招待されたのではないかと考えられる。改めて楚人冠の経歴を眺めてみる。

杉村楚人冠(本名廣太郎(明治五(1872)年〜昭和二十(1945)年)は和歌山県生れ。筆名は楚人冠(その他縦横生など多数)。父は旧和歌山藩士杉村庄太郎。3歳の時父に死別し、母の手ひとつで育てられた。16歳の時、和歌山中学校中退。上京して司法官または弁護士を目指して英吉利法律学校(この法律学校は明治二十二年に東京法学院(中央大学の前身に校名を変更)に入ったが1年あまりで退学。

東京法学院出身の楚人冠と慶應義塾の「三田新聞」

にどんな関係があったのか?また楚人冠が大正四(1915)年に発行した『最近新聞紙学』の初版本は「慶應義塾出版」から出版されている。この本の巻頭言の中に「最初の原稿は中央大学と慶應義塾との講話に用いた講本であったが、・・・とあるのも、慶應義塾と楚人冠との何がしかの関係を想像させる。

ところで日本における大学新聞の歴史は、大正6年の慶應義塾大学の「三田新聞」に始まるらしい。そして大正9年には東京帝国大学の「帝国大学新聞」が刊行されるなど、その後、大学における新聞刊行が相次いで。

実は本邦初の大学新聞「三田新聞」の創刊に楚人冠が大きく関わっていたことが分かった。

第121回史跡文学散歩 報告記

「中世、河村出羽守勝融が築城した芝原城址と、関連の寺、法岩院、古利根沼などを探索」

牧田 宏恭

平成27年度最終の史跡文学散歩は平成28年3月27日(日)午前9時過ぎ、湖北駅を起点に中峠・小堀地区巡る表記の散策で、参加者は22名(会員10名・非会員12名)であった。ここ数日、桜の開花も遅れるひと月前の寒さに逆戻りの天候が続く中、本日も予報では、天候が危ぶまれるスタートとなった。

スタートに先立ち、当会的美崎会長の挨拶。続いて本日のガイドを務められる、当会会員で且つ「我孫子ガイドクラブ」所属の田中由紀さんより、およそのコースと概要の案内があった。田中さんはこの地区に住まわれ、「自身が「より詳しいお話をしたい」と挨拶。また配布されたレジュメには訪問先について、詳しい説明が記載されており、それを見ながら歩を進めることとなった。

まずは、成田線の歴史そして今なお残る湖北駅の「行商人と鉄製荷台」の説明で口火を切った。

コースは、最初の訪問先の一石七観音を拝し、中里

庚申堂から中峠阿弥陀堂墓地、そして長光院、中峠の庚申塔群を通り(9時40分)、法岩院を詣で、続いて古利根沼方面に向かった。大和住宅地を右手に見ながら、途中、待道塔(まちどうとう)のある、待道大権現中峠水神社前を通ると程なく視界が開け、古利根沼に到着(10時25分)、波除不動尊を拝する。沼の対岸に位置する小堀(おほほり)地区はお隣、茨城県取手市であり、現在では、利根川を挟んだ我孫子市側の飛び地的な地域である。

田中さんの、要所々で絵図入りのパネルを用い、ハンズフリーのマイクを活用しての説明は、理解をより深いものにした。

続いて、近くにある芝原城址に向かった(この城は嘗て河村出羽守勝融が整備した城郭があった処)(10時50分到着)。城址の「自然観察の森」の前で記念撮影をし、亀田森稲荷神社を訪れた。

神社前で取りあえず解散(11時30分)とし、越岡副会長の挨拶で締めた。

時間に余裕のある希望者には、引き続き田中さんの案内で、中峠亀田谷公園(地下が巨大な雨水槽)から順堂塚に向かい本日の散策を終了した。起点の湖北駅に戻り、解散となった。心配された降雨にも会わず、住宅地の庭先に咲いた美しい花、そして、ところどころ開花し始めた「ソメイヨシノ」を愛でながらの3時間弱の探索(散歩)であった。

本日の訪問先について説明の要旨は以下の通り。

(1)成田線

明治34年(1910)に成田鉄道は日本鉄道線の我孫子駅まで連絡し、上野駅への直通開始。翌明治35年4月には



成田山御開帳にあわせ、喫茶室付き客車を連結。快適な旅を提供した。千葉駅経由の成田線との間で成田までの乗客獲得を競い合った。

(2) 庚申堂

屋根付きの堂内に庚申塔が安置されているのは珍しく、我孫子では此処のみ。庚申の日は2月8日の初庚申に始まり、12月8日の納庚申までひと月置きに年6回が決められているようだ。

(3) 長光院(法岩院の末寺)

曹洞宗の寺院で円通山と号す。小田原北条氏の家臣と言われ、千葉氏末裔の芝原城主河村出羽守勝融が天文11年(1542)開基。嘉永の震災以後、飯堂のまま推移。後に、寺小屋が営まれていたとのこと。境内にある筆子塚はその名残であり、長光院の第10世、11世和尚の飯田右衛門が祀られている。

ここには、嘗て櫻の原木があったが、今は無残にも樹頂は無く、幹の途中で伐採された姿が痛々しい。

(4) 中峠庚申塔群

江戸時代に盛んになった庚申信仰は、庚申塔を建て無病息災を祈願。享保から天保時代に建てられた庚申塔が並ぶ(青面金剛・猿田彦大神を信仰対象とした8体がある)。なお、庚申塔を覆う様にスタジイの巨木が最近まであったが(当会・巨木探索プロジェクトにて調査)、枝が短く払われ無残な様相を呈していた。

(5) 祝融山「法岩院」

天文11年、河村出羽守勝融が開基。曹洞宗の寺院。入り口には「不許葷酒入山門」の碑がある。出羽守の墓や、筆子塔がある。

(6) 「古利根沼」と「小堀の渡し」

昔、取手付近で利根川は南に大きく蛇行していたことから、度重なる洪水に悩まされたため、明治末か



ら大正初めに掛けて、流れを直線状に変え、取手側の井野村小堀(おおほり)地区は現在の利根川の南側に分断され(我孫子側に残る取手)残った川の部分が「古利根沼」と呼ばれ、現在も残されている。「小堀の渡し」は、不便解消のため小堀地区と対岸の取手と結ぶ「渡し」として住民が運航開始したもの。

(7) 波除不動尊

江戸時代、利根川の洪水のたびに城山断崖のかけ崩れが起った。このため享保3年(1718)、不動尊を断崖麓に安置したところ、その後出水時の流れにも崩れることが無くなったといわれる。なお、お堂前にある杉の巨木は、当会の巨木プロジェクト探索の際に、測定済みであり、幹の周囲は3メートルに達している。

(8) 芝原城址(中峠城址)

北側を古利根に接する崖上、南は谷の地形、東側には空堀や土塁跡も残る城址。河村出羽守勝融が天文10年(1541)入城し中峠城と改名したと言われている。天正18年(1590)小田原の役にて、北条氏の滅亡と共に滅ぶ。以上報告します。

我孫子市の巨木・名木を訪ねる会

(第211回調査報告)

佐々木侑

ことのほか寒さが身に凍みる、大寒の一月二十一日(木曜)、我孫子駅北口に7名(男性6名・女性1名)が集合し巨木調査を実施した。暦の上では大寒の日から寒さがさらに厳しくなり、一年中で最も寒い時季である。

当日の調査行程へ移動にはマイカーを使用

我孫子駅北口9時↓足尾山神社↓新木香取神社↓

西音寺↓下ヶ戸八幡社↓個人宅(△氏邸)12時↓高野山ファミレス↓解散13時

行動時間: 3時間

調査樹木本数15本: 巨木本数13本(091~103)、参

考樹木本数0本

*調査場所の概要と主要な樹木を略記する。

新木香取神社(新木 2,598)

鎮守の森が残り自生植物・樹木の宝庫であり巨木が多い。境内の樹木はケヤキ・タブノキ・スタジイ・ムクノキ・イヌマキ・サカキ・イヌザクラ・ヤブツバキ・イチョウ・スギ・ヒノキ・モツク・モチノキ・シロヒ

調査中に突如として野兎が神社の杜の中から逃げ出し、驚嘆させられた。

093、スタジイ(樹高20.9m 幹周380cm)参道の右側

094、ムクノキ(樹高26.1m 幹周365cm)参道の左側

095、イヌザクラ(樹高20.4m 幹周240cm)拝殿右脇

側、イヌザクラは幹周200cm以上で巨木と判定する。

下ヶ戸八幡社(下ヶ戸 288 西音寺裏奥)

下ヶ戸の八幡社境内には、イチョウ・スタジイ・ウメ・サクラ・スギ・クスノキ・シロダモ・シラガシ・ヤブツバキなどが鎮守の森を構成している。

100、イチョウ(樹高15.9m 幹周390cm)樹木頭部が伐採されて幹周の大きさに比べ樹高が低い。

個人邸K△氏邸(下ヶ戸 277)

下ヶ戸地区内の旧道で御屋敷堀からはみ出さんばかりにその存在を誇示している、みごとなスタジイの巨木が2本ある。

このスタジイの風景は以前に我孫子市の絵葉書にもなっていたそうである。

102、スタジイ①(樹高21.7m 幹周565cm)我孫子市内のスタジイではNO.1巨木である。

*個人所有巨木や、法人所有地の巨木については調査モレの樹木もあるが、今回をもって2回目の巨木・名木の市内調査は終了する。(累計: 巨木 103本、参考樹木 37本)

文学掲示板

平成二十八年五月展示作
品(文学の広場)

かいどうの花みな散りて若
葉もゆ
庭の明るさ日々にもとれ
ぬ



流山 高森 恵子

時かさね花見のできるまでになり
友を招かむ沼ぞいの桜

我孫子 黒澤 里子

冷え続く日々を保ちし普賢象
今日散り止まず花莖なす

我孫子 三谷 和夫

湯上りの香りほのかな友といて
満天の星見上げしあの日

流山 田口 藤造

愛憎のハードル越えしか「母の日」の
娘のビスケット口に溶けゆく

流山 宮坂 叔子

走りゆく人に問われり金色の
実なる樹梅檀(せんたん)紫の花

我孫子 佐々 木侑

楚人冠俳句二序跋詩歌集より 杉村楚人冠

昭和八年春

春の雨もてあそび行く傘ぐるま
春立つや風雨順なるまつりごと
春おぼろ高壓線のいかつきに
池にうつる櫻の影の亂れがち
庭詰の僧のうなじに花の散る
筧より温泉壺(ゆっぼ)にたまる落花かな

第122回史跡文学散歩のお知らせ

「対岸の旧沼南町の史跡を訪ねる」

会員の皆様のご要望もあり、今年度の史跡文学散歩は近隣の史跡を訪ねます。

まず初めに我孫子の対岸の箕輪から鷲野谷地区をご案内します。平将門ゆかりの地、大正の法然と言われた高僧・弁栄上人生誕の地、そして日本点字の父である石川倉次が教鞭をとっていた所でもあります。当会としても初めて紹介するコースです。

ご期待下さい。

1. 日時 五月二十九日(日)8時30分、我孫子駅南階段下集合。「手賀の杜ニュータウン」行きバス乗車。(小雨決行) 2時頃解散予定。

2. コース (道の駅沼南前で下車)如意寺一将門神社渡船場道標一石一字塔一染谷家一香取神社一医王寺(弁栄上人墓、石川倉次教鞭の地)講師・ガイド 越岡禮子氏(当会副会長)参加費 会員 無料、非会員 500円申し込み TEL&FAX(七二八四)二〇四七 越岡まで

今後の行事予定

□ 「放談くらぶ」

日時 4月3日(日) 14時〜16時

会場 市民プラザ第1会議室

講師 三谷 和夫氏

演題 『白樺村と美術館』

日時 6月11日(土) 14時〜16時

会場 アピスタ第2会議室

講師 美崎 大洋氏

演題 『楚人冠と慶應義塾の意外な関係』

◎参加費 会員無料 非会員三〇〇円
申込み TEL&FAX(七二八五)〇六七五
佐々木まで

当会の最近の動き(報告)

散歩部会

3月27日(日)第121回史跡文学散歩

「中世。河村出羽守勝融が築城した芝原城址と、関連の寺、法岩院、古利根などを探索」
ガイド 田中由紀氏

手賀沼部会

2月11日(木)水草展示会(於・千葉県立中央博物館)当会より8名参加

2月28日(日)印旛沼流域圏交流会、齋藤役員参加

研修部会

2月6日(土)放談くらぶ

「将門王国を湖北に求めて」戸田七支氏

次回役員会予定

日時 5月1日(日) 13時30分〜16時

場所 けやき10階大会議室

(入会員紹介)1月以降次の方が入会されました。

古谷光弘

(以上1名、敬称略)

会費納入案内についてのお詫言とお願い

前回の会報(平成28年1月)にて「本年度会費納入のお願い」としてご案内いたしましたところ、わざわざ納入の手続きに行かれた方がいらつしやいました。またその指定振替口座番号に間違いがあり二重にご迷惑をおかけしました。申し訳ありません。当会云の新年度は4月からになります。今回振込用紙を同封させて頂きましたので改めて今年度会費の納入をお願い致します。

郵便振替口座(00190-3-135476)『我孫子の文化を守る会』宛お振込みください。

編集後記

今年の東京の桜の開花は例年に比べ、早い予想でした。しかしその後寒い日が続く満開まで待たされることになりました。▲私は4月3日に花見を予定していたため遅めの満開を期待しました。大方の人とは逆に満開にならないことを期待するのも妙な気がするが。(M)